道真『菅家文草』『菅家後集』の漢語研究（其四・鳴き声を表す畳語篇）「嗷嗷」「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」

中山大輔

論文要旨

本稿は、菅原道真の漢詩漢文集『菅家文草』『菅家後集』に用例のある漢語畳語、「嗷嗷」「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」の四語について、中国における用法と照らし合わせ、本邦独自の和習的な側面がないかを含め、道真作品上の解釈について考察を試みるものである。調査の結果、この四語については中国における用法に従った、正しい意味用法で用いられている事が確認できた。

なお、『菅家後集』の詩における「喃喃」「嘖嘖」については、川口久雄氏校注旧大系本などの注釈書で「さわがしいさま」と言った解釈が示されており、『大漢和辞典（第二版）』の語釈でも同様の意味記述であった。しかし、中国唐代の詩の例を確認したところ、「さわがしい」等の意味合いは薄く、端的に鳥の鳴き声として用いている例も確認でき、『菅家後集』の用例はこちらの中国例に近い意味で用いられている可能性が高いと考えられた。詩における言葉の解釈には汎く用例に当たり慎重を期す必要があること、また、道真の語彙用法の豊かさを示す一例として報告したい。

キーワード【菅原道真、菅家文草、菅家後集、畳語、鳴き声】

一、はじめに

本稿は、平安前期に活躍した菅原道真の漢語研究の一環として、その漢詩漢文集『菅家文草』『菅家後集』の中で用いられている漢語畳語「嗷嗷」「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」について、中国での用法に沿ったものであるか、あるいは、何らかの和習を帯びているか等について考察を試みるものである。

これまで本稿執筆者は、菅原道真の用いた漢語について調査を進めてきた（安部・中山（二〇一二）、中山（二〇二二甲）（二〇二二乙）（二〇二三））。本稿では、道真の用いた漢語畳語の内、動物の鳴き声を表した語彙に焦点を当ててみたい。中山（二〇二二甲）において、擬音語的で意味が中国語音によって表される漢語畳語の、本邦における受容の困難さを指摘した。本稿で取り上げる「嗷嗷」

「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」は、いずれも中国語音によって動物の鳴き声が表現されていると考えられる語彙である。それを漢詩漢文において中国での用法に沿った意味で用いるためには、中国語音で表される微妙な音感・語感を把握する必要があったと考えられる。そうした語彙を道真が作品中で正確に用いているのか、所謂和習が無いかを確認することで、平安前期の本邦の文人らの中国語への理解の熟練度を窺ってみたい。

二、調査方法

『菅家文草』『菅家後集』に用いられた漢語畳語「嗷嗷」「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」について、それぞれ中国における用法に準じたものであるか、実際の用例に当たり精査をする。また、それぞれの語に対する日中双方の辞書語釈を確認し、語義解釈の傾向が見られないかについても検討した。

【凡例】

◆用例収集は主に以下に拠った

『全唐詩』、『唐宋詩全文資料庫』、『宋詩（元智大学）』、『漢籍電子文献資料庫』、『中国哲学書電子化計劃』、『佩文韻府』、『大漢和辞典（修訂第二版）』、『学研漢和大字典』、『漢語大詞典』、『日本国語大辞典（第二版）』

◆用例の引用元

『菅家文草』『菅家後集』は川口久雄校注『日本古典文学大系72 菅家文草 菅家後集』（訓み下し文も引用した）、『全唐詩』は『全唐詩検索系統』、『広韻』は国立国会図書館蔵宋刊本『大宋重修広韻』より引用した。その他は題名下に都度括弧［ ］書きで引用元の資料・注釈書名を示した。参照した注釈書類に訓み下し文が付されているものについては、そちらも注記の上引用した。振り仮名についても適宜引用した。また、各用例の引用に用いた注釈書類について、本文中でその訳注等を引用する際、単に「注釈書」と略記した。

◆本稿で用いた略称（**太字**）

『**文草**』＝『菅家文草』、『**後集**』＝『菅家後集』、『**川口大系**』＝川口久雄校注『日本古典文学大系72 菅家文草 菅家後集』、『**大漢**』＝『大漢和辞典（修訂第二版）』、『**学研漢和**』＝『学研漢和大字典』、『**漢詞**』＝『漢語大詞典』、『**日国**』＝『日本国語大辞典（第二版）』

◆用例文の掲載については、以下の記号を使用した

◎＝『文草』『後集』の用例（『川口大系』の作品番号も付し、当該畳語についての注も引用した。）

○＝『文草』『後集』以外の用例

◆その他

旧字体については、解釈に影響のない限り新字体に改めた。用

例・引用文の傍線等は、特記の無い限り本稿執筆者が付したものである。

三、『菅家文草』における畳語「嗷嗷」

「嗷嗷」は『文草』中に一例、「閭巷犬」（村里の犬ども・『川口大系』頭注）の騒ぐ声として用いた例が見られる。本稿は動物の鳴き声を表す畳語を扱っていくが、この「嗷嗷」例は実際のイヌの吠える声を表したものではなく、民衆の罵りの声を表現したものと考えられる。よって、動物ではなく人間の声を表した用例となるが、その点は措いて、意味用法を考察してみたい。

◎『菅家文草』巻三　二三六「舟行五事」五首之五

（前略）

納受即言曰　納受して即ち言ひて曰く
施主誠足馮　「施主　誠に馮みまつるに足れり
今朝如不遇　今朝　如し遇ひたてまつらざらませば
屍僵遂無興　屍僵れて遂に興つことなからまし」といふ
彼非須我食　彼は我を須ちて食ふに非ず
我非知彼矜　我は彼を知りて矜れぶに非ず
嗷嗷閭巷犬　嗷嗷たり　閭巷の犬
当吠此僧朋　当に此の僧朋を吠えよ

【川口頭注】啼きののしる村里の犬どもよ。嗷嗷は、衆口の罵り叫ぶ声のさま。

情景としては、口々に罵る民衆の声を「嗷嗷」で表していると考えられる。「吠」ともある様に、強い口調で罵る声が想像される。「非難囂囂」の「囂囂（ごうごう）」と音が同じであり、それと意味も近いだろうか。まず、辞書語釈から確認してみる。

〈「嗷嗷」辞書語釈〉

『漢詞』亦作〝謷謷〟。❶哀鳴声；哀号声。❷叫呼声；叫喊声。❸衆口愁怨声。❹形容衆声喧雑。

『大漢』㈠かまびすしく呼ぶ声。㈡衆人の愁へる声。㈢衆人の罵りそしる声。㈣雁の鳴声。

『学研漢和』①がやがやと大声で騒ぐさま。②多くのものが悲しみや苦痛の声をあげるさま。

『日国』口やかましいさま。特に、不満・批判などの声のさわがしいさま。囂囂（ごうごう）。

辞書によると、罵る意味よりも「愁へる声」「悲しみや苦痛の声」の意味が先に置かれているようである。『川口大系』における『文草』の「嗷嗷」の解釈「衆口の罵り叫ぶ声のさま」に近い語釈に二重傍線を付したが、『漢詞』『大漢』ではそれぞれ第四・第三義に列

していた。ただ、『漢詞』❷「叫呼声」や、『大漢』㊀「かまびすしく呼ぶ声」というのも、騒がしい声と考えられ、「罵り叫ぶ」と通ずるとも言えようか。また、愁えも罵りも、どちらも不満を言う点では共通しているとも捉えられる。

次に、「嗷」の字音から、実際どの様な擬音語であったのかを確認してみたい。

〈「嗷」字音〉

『切韻』［Pelliot. 2011］下平声豪韻・五労反　衆口愁※

『広韻』下平声豪韻・五労切　衆口愁也※

『学研漢和』（中古音）ŋau

※『切韻』『広韻』は、いずれも「𠮷」（「口」が偏ではなく脚に付く）字の記述を引用した。今回参照した『切韻』には「嗷」字の記載は確認できなかったが、『広韻』には「嗷」字の意注として「上（引用者注・𠮷）同」とあり、「嗷」と「𠮷」は異体字の関係にあると考えられる。

『学研漢和』に拠れば、中国唐代の発音としては「ガウ」が近いであろうか。『切韻』『広韻』の意注には「衆口愁」とあり、「嗷」一字でも悲しみの声を意味していた様である。ただ、悲しみや罵りの声として「ガウガウ」とそのまま発声したとは想像しづらいため、「ああ」の様に実際の場面で口に出す台詞・間投詞ではなく、状況を感覚的に表すオノマトペ的な語彙であったと考えられる。

中国における「嗷嗷」の用例は、『全唐詩』でも全二十三例確認でき、詩でも屢々用いられる語であったと言えるだろうか。以下年代順に三例を挙げる。白居易の例については、『白氏文集』により本文を確認した。

○『全唐詩』巻四七　張九齢「二弟宰邑南海、見群雁南飛、因成詠以寄」

鴻雁自北来　**嗷嗷**度煙景
常懐稲粱恵　豈憚江山永
（後略）

張九齢は盛唐の人物で、この詩では北から渡ってきた鴻雁の鳴き声として「嗷嗷」が用いられている。「かまびすしい」「罵る」と言った意味合いはなく、純粋に雁の鳴き声を表現した用例と考えられる。

○『全唐詩』巻一六四　李白「空城雀」

嗷嗷空城雀　身計何戚促
本与鷦鷯群　不随鳳凰族
提携四黄口　飲乳未嘗足
（後略）

この李白の用例では、雀の鳴き声に「嗷嗷」が用いられているとみられ興味深い。「雁」の鳴き声としての用法については、『大漢』の第四義にも記載があったが、雀の鳴き声としても「嗷嗷」が用いられる場合があった様である。ただ、実際の雀の鳴き声としては「嗷嗷（ガウガウ）」では似つかわしくない様にも考えられる。ここでは六句目に「飲乳未嘗足」と、雀が空腹の不満を漏らしていると取れる表現もあり、人間の「罵り叫ぶ声」に見立てて雀の鳴き声を「嗷嗷」と表現した可能性もある。

○『白氏文集』巻一「夏旱詩」（部分）［『新釈漢文大系　白氏文集一』］※訓読もこれによる

旱日与炎風　旱日と炎風と
枯燋我田畝　我が田畝を枯燋す
金石欲銷鑠　金石すら銷鑠せんと欲す
況茲禾与黍　況んや茲の禾と黍とをや
嗷嗷万族中　嗷嗷たる万族の中
唯農最辛苦　唯だ農のみ最も辛苦す

こちらの白居易の用例では、旱魃に苦しむ民衆の苦悩の声が「嗷嗷」で表されている。注釈書には、「多くの人々の愁い嘆く声」と語釈があり、通釈では「ごうごうと泣き叫ぶ」と訳されている。「嗷嗷」を「泣き叫ぶ」様子のオノマトペと取る例もある様である。

『全唐詩』以外の「嗷嗷」の用例としては、『詩経』一例、『史記』一例、『漢書』一例、『晋書』二例、『魏書』六例、『南斉書』一例、『宋書』一例、『三国志』一例の計十四例を確認できた。以下『詩経』と『史記』の例を挙げる。

○『詩経』小雅　鴻雁之什「鴻雁」（部分）［『新釈漢文大系　詩経中』］※訓読もこれによる

鴻雁于飛　哀鳴**嗸嗸**　鴻雁ここに飛び　哀鳴すること嗸嗸たり
維此哲人　謂我劬労　此の哲人は　我を劬労すと謂はん
維彼愚人　謂我宣驕　彼の愚人は　我を宣驕なると謂はん

この『詩経』「鴻雁」の例が、「嗷嗷（嗸は嗷の異体字）」を雁の鳴き声として用いたごく古い用例と考えられる。ただ、注釈書の語釈に「「嗸嗸」は、屈万里が「嗸嗸は、愁苦の声」とするにより、鳥が哀しげに鳴く声の擬声語」ともあり、「嗷嗷」は元来「愁苦の声」を表す擬声語であり、それを「哀しげに鳴く」鳥（雁）の声の形容に当てる様になった、という用法の変遷も推測される。つまり、時代が下れば「嗷嗷」即ち雁の声、という認識も出てくるかも知れないが、実際の雁の鳴き声を音で描写したものが「嗷嗷」、と言う訳ではない可能性も考えられる。実際の雁（マガン）の鳴き声が「ガウガウ」に聴き取れなくもないため、雁の鳴き声の用法が先か

民衆の愁苦の声の用法が先かは判断が難しくもある。

『詩経』中にはもう一例、民衆の愁苦の声としての「嗷嗷」の用例が確認できたが、本文異同が存在するため、本稿では注記で取り上げるのみとする（注一）。

○『史記』巻六　秦始皇本紀二世三年（部分）［『新釈漢文大系　史記　一』］※訓読もこれによる

今秦二世立、　今、秦の二世立つや、

天下莫不引領而観其政。　天下領（くび）を引きて其の政を観ざるもの莫し。

夫寒者利裋褐、　夫れ寒（こご）えたる者は裋褐（しゅかつ）を利とし、

而饑者甘糟糠、　而して饑ゑたる者は糟糠を甘しとす。

天下之**嗷嗷**、　天下の嗷嗷たるは、

新主之資也。　新主の資なり。

此言労民之易為仁也。　此れ労（つか）れたる民の仁を為し易きを言ふなり。

この『史記』の「嗷嗷」例は、注釈書では「衆人の愁えさわぐ形容」と解釈されている。秦始皇帝の圧政に対する天下の不満を「嗷嗷」で表し、それが却って「新主之資」、新しい君主にとっては民衆の心を摑む好機になる、と言った文脈である。少なくとも『史記』の編まれた前漢の時期には、既に「衆人が罵りそしる声」（『大漢』㈡）としての「嗷嗷」の用法があったと考えられる。

以上、今回確認できた唐以前の中国における「嗷嗷」例について、意味用法を次の表一に整理してみた。

表一　唐以前の中国における「嗷嗷」の意味用法

用例の文体	「嗷嗷」の意味用法	用例数	用例資料・作者名
詩	鳥の鳴き声		
	雁	7	『詩経』、李端、武元衡、韓愈、他
	雀	2	李白、陳陶
	烏	1	儲光羲
	朱鳳	1	杜甫
	種の特定なし	2	王勃、孟郊
		(13)	
	世間の不満・愁いの声	10	李白、杜甫、柳宗元、白居易、他
	自然の音（雨音）	1	杜甫
散文	世間の不満・愁いの声	14	『史記』、『漢書』、『晋書』他
合計		38	詩24例、散文14例

詩の用例としては、鳥の鳴き声としての用例が計十三例で、世間の不満・愁いの声としての用例も十例確認できた。つまり、詩における「嗷嗷」は、鳥の鳴き声としての用法についても、辞書語釈の謂う「衆人の愁へる声」「衆人の罵りそしる声」としての用法と同程度の頻度で用いられていた可能性が考えられる。ただ、鳥の鳴き声であっても、餌が少ないと言う様な不満を含んでいたり、雁の哀しげな愁いを含む鳴き声としての用例も見られた。先掲の『詩経』例の「哀鳴**嗷嗷**」に代表される様な、愁いや不満を含む鳴き声としての認識があった可能性がある。そうであれば、世間の不満・愁い

の声に用いる場合と同系の用法であると言え、純粋な鳥の鳴き声としての用法ではないと捉えることもできるかも知れない。

対する散文の例としては、今回確認できた全十四例が世間の不満・愁いの声の用法であり、鳥の鳴き声としての用法が見られなかった。詩における用法と区別があった可能性も考えられるだろうか。

道真詩の「嗷嗷」についても、中国の散文や詩に見られる世間の不満・愁いの声としての用法に準拠して用いられたものと考えられる。ただ、道真詩の例では、民衆の比喩ではあるが、「犬」に「嗷嗷」を掛けている点で、動物の鳴き声に見せかけてもいて、中国における鳥の鳴き声としての用法と通じる点があるようにも思われる。中国例としては今回、鳥以外の動物の鳴き声に「嗷嗷」を用いた例は確認できなかったため、犬の吠える声に見せかける点は道真独自の用法とも言える。

四、『菅家文草』における畳語「咬咬」

「咬咬」は鳥の鳴き声を表す語として、『文草』に次の一例がある。

◎『菅家文草』巻六　四五七「寒食日、花亭宴、同賦介山古意、各分一字」二首之一（全文）

今朝不到太原郊　今朝　太原の郊に到りしにあらず
禁火思人異代交　火を禁めて人を思ひ　代を異にして交る
遥計春風綿上事　遥に計れらくは　春風綿上の事
残花灼〻鳥**咬〻**　残んの花は灼灼たり　鳥は咬咬たり

【川口頭注】鳥たちはしきりにさえずっている。（引用者略）咬咬は、鳥の囀る声。

【川口補注】「咬咬」は、嵇康の詩に「黄鳥鳴いて相追ふ、咬咬として好音を弄す」、禰衡の鸚鵡賦に「采采たる麗容、咬咬たる好音」とある。

詩題にある「寒食」は、冬至から百五日目に行われた「火断ちをして煮たきしないで物を食べた」（『日国』）中国由来の風習である。その日の情景を詠んだ詩である事から、「咬〻」は春の鳥の囀る声を表していると考えられるが、鳥の種類については不明である。詩の構成としては、「灼〻」と「咬〻」が畳対になっており、また脚韻字の「郊」「交」「咬」は韻だけでなく字形としても「交」の共通点があって面白い。

まず「咬咬」の辞書語釈を確認してみると以下の通りである。

〈「咬咬」辞書語釈〉

『漢詞』　鳥鳴声。

『大漢』（カウカウ）鳥の鳴く声。

『学研漢和』（カウカウ）鳥のさえずる声の形容。

『日国』（立項なし）

記載のあるいずれの辞書でも鳥の鳴き声としての意味だけが示されており、用法はほぼ一定した語であったと考えられる。「咬」の字音については以下の通り。

〈「咬」字音〉

『切韻』［Stein. 2071］下平声肴韻・古肴反　鳥声

『広韻』下平声肴韻・古肴切　鳥声

『学研漢和』（中古音）kǎu

『切韻』『広韻』には「鳥声」と意注もあり、「咬」単体でも鳥の鳴き声を表していた様である。また、『学研漢和』の音声記号に従えば、「咬咬」は「カウカウ」に近い音であったと考えられる。『文草』の詩における、春に「カウカウ」と鳴く鳥とすれば、郭公などが想像されるだろうか。

次に、中国における用例を見てみたい。『全唐詩』に「咬咬」の用例は四例確認でき、いずれも鳥の鳴き声としての用法であった。以下年代順に掲載する。

○『全唐詩』巻一八九　韋応物「送洛陽韓丞東遊」

仙鳥何飄颻　緑衣翠為襟

顧我差池羽　**咬咬**懐好音

（後略）

○『全唐詩』巻五七五　温庭筠「常林歓歌」

宜城酒熟花覆橋　沙晴緑鴨鳴**咬咬**

穠桑繞舎麦如尾　幽軋鳴機雙燕巣

（後略）

○『全唐詩』巻六四三　李山甫「方干隠居」（全文）

咬咬嘎嘎水禽声　露洗松陰満院清

溪畔印沙多鶴跡　檻前題竹有僧名

問人遠岫千重意　対客間雲一片情

早晩塵埃得休去　且將書剣事先生

○『全唐詩』巻七〇七　殷文圭「鸚鵡」（全文）

丹觜如簧翠羽輕　随人呼物旋知名

金籠夜暗山西夢　玉枕暁憎簾外声

才子愛奇吟不足　美人憐爾繡初成

応縁是我邯鄲客　相顧**咬咬**別有情

いずれの例も、鳥の鳴き声として用いられており、かつ、「好音」「歓歌」等とあるように、好ましい、美しい情景での鳴き声を表していると考えられる。また、鳥の種類としては、「仙鳥」（作者名・

韋応物　以下同）、「緑鴨」（温庭筠）、「水禽」（李山甫）、「鸚鵡」（殷文圭）とそれぞれ分かれており、特定の鳥の鳴き声に用いられていた訳ではなかったようである。

この他の「咬咬」の中国用例としては、『文選』所収の詩と賦に以下の計二例を確認できた。

○『文選』禰衡「鸚鵡賦」（部分）［『新釈漢文大系　文選（賦篇）下』］※訓読もこれによる

飛不妄集　翔必択林。　飛びては妄りに集まらず　翔りては必ず林を択ぶ

紺趾丹觜　緑衣翠衿　紺趾丹觜　緑衣翠衿あり

采采麗容　**咬咬**好音　采采たる麗容　咬咬たる好音あり

雖同族於羽毛　族を羽毛に同ずと雖も

固殊智而異心　固に智を殊にして心を異にす

○『文選』嵇叔夜「贈秀才入軍」五首之二（部分）［『新釈漢文大系　文選（詩篇）上』］※訓読もこれによる

春木載栄　春木は載ち栄え

布葉垂陰　葉を布き陰を垂る

習習谷風　習習たる谷風

吹我素琴　我が素琴を吹き

咬咬黄鳥　咬咬たる黄鳥

顧疇弄音　疇を顧みて音を弄す

この禰衡と嵇叔夜の用例は、『川口大系』補注において両例共「咬咬」の先行例として引かれていた。いずれも、注釈書では「鳥のさえずる声」と語釈がなされており、『全唐詩』の例と同じ意味用法であると考えられる。鳥の種類については、禰衡の例では題名が「鸚鵡賦」のため「鸚鵡」であり、嵇叔夜の例では「黄鳥」とあるが、こちらは注釈書では「鶯」として解釈されていた。

以上、中国における「咬咬」例を見てきたが、どの例も鳥の鳴き声として用いられている事が分かった。また、『全唐詩』と『文選』の全六例が確認できたが、この他の道真以前の中国文献では用例を確認できなかった。つまり、散文では余り用いられなかった語である可能性もある。

『文草』の「咬咬」例は、これらの「鳥の鳴き声」としての中国の詩や賦の用法通りに用いられていると考えられる。文法面としては、『文草』例では「残花灼々鳥**咬々**」と句末に「咬咬」が用いられているのに対し、『全唐詩』中二例と『文選』の二例は句頭、『全唐詩』中一例が句中にあり、『全唐詩』中一例温庭筠の例のみが句末に置く用法であった。句末に「咬咬」を用いるのは、中国においては稀であった可能性もある。

五、『菅家後集』における「喃喃」「嘖嘖」

本章では『後集』にて「喃喃嘖嘖」として連続して用いられている「喃喃」と「嘖嘖」について考察する。『後集』における用例は次の通り。

◎『菅家後集』四七七「詠楽天北窓三友詩」（部分）

燕雀殊種遂生一　燕雀　殊種なれども生を遂ぐること一つなり
雌雄擁護遞扶持　雌雄擁護して遞に扶持す
馴狎焼香散華処　馴れ狎れたり　焼香散華の処
不違念仏読経時　念仏読経の時を違へず
応感不嫌又不厭　感ずべし　嫌はずまた厭はざることを
且知無害亦無機　且知る　害もなくまた機もなきことを
喃〻嘖〻如含語　喃喃嘖嘖として語を含めるが如し
一虫一粒不致飢　一虫一粒すら飢ゑを致さず
彼是微禽我儒者　彼はこれ微禽　我は儒者なるものを
而我不如彼多慈　而るものを我は彼が慈多きに如かず

【川口頭注】喃喃は、くどくどと語るさま。嘖嘖は、やかましく言い争うさま。喃喃は、より多く燕の声にいい、嘖嘖は、より多く雀の声にいう。「含語」、板本「合語」に作る。

詩の場面としては、読経をしている近くに燕や雀が飛んできて、囀っている様子を詠んだものと考えられる。『川口大系』頭注によると、「**喃喃**」は「くどくどと語るさま」「燕の声」、「**嘖嘖**」は「やかましく言い争うさま」「雀の声」と解釈されている。この「喃喃嘖嘖如含語」の句について、先行の『後集』注釈書では以下の様に解釈されていた。

〈「**喃喃嘖嘖**如含語」の解釈〉

○清藤（一九四三）通釈「仲よく囀るさまは恰も合語するものゝ如く」

○清藤（一九五三）「かれらがさえずるさまは、ちょうど、仲よくおしゃべりし合つているようだ」

○清藤（一九七一）「かれらの囀るさまは　まるで仲よく睦言をかわしているみたい」

【※本稿執筆者注・以上三件の清藤氏の注釈書では、「喃喃嘖嘖如**合**語」を本文とする】

○柳澤（二〇〇二）「燕の声はぺちゃぺちゃとしゃべるかのようで、雀の声はやかましく、何かを言い争うかのように聞こえてくる」

○谷口（二〇〇六）二四七頁「「喃喃嘖嘖」は燕雀などの鳴き声の擬音語であるが、それぞれ白居易にその使用例を見る。（引用者中略）白詩においてはこの擬音語に導かれて鳥を詠うさいに、鳥の親子の睦ましさをいうことに注目したい。道真は燕雀の「喃喃

嘖嘖」という鳴き声に喚起されて、「彼是微禽我儒者、而我不如彼多慈」と、親の子に対する「慈」に思いいたる。」

清藤氏はこの道真詩の「喃喃嘖嘖」について、燕雀の「仲よく」囀る・おしゃべりし合う・睦言をかわす情景として解釈されている。谷口氏は、「白詩においては（引用者中略）鳥の親子の睦ましさをいう」とされており、これが道真詩の解釈にも当たるかは明言されていないが、「親の子に対する「慈」に思いいたる」ような、好意的な鳴き声として位置づけられている。対して、柳澤氏の解釈では、「ぺちゃぺちゃと」「やかましく」とある様に、『川口大系』頭注と同じく騒がしい鳴き声として捉えられている様である。なお、「喃喃嘖嘖」の後に続く「含語」については、『川口大系』頭注に記載のある通り「合語」とする異文もあるものの、いずれの解釈でも詳しくは触れられていなかった。この本文異同については次節で詳しく考察してみたい。

本稿としては、この詩では燕雀について「雌雄擁護遞扶持」（引用二句目）、「彼多慈」（引用末句）と言った好意的な表現があるため、『川口大系』や柳澤氏の取られる「やかましい」と言う様な否定的な解釈は加える必要がないのではないかと考えたい。ここでの「喃喃嘖嘖」は、「くどくくどと」「やかましく」と言った邪険に捉える意味合いはなく、清藤・谷口両氏の解釈の様に、燕雀の慈愛を感じさせる様な、好ましい鳴き声を表した擬音語であると捉えるのが自然ではないかと考える。

五―（一）、「含語」の本文異同（「合語」）

「喃喃嘖嘖」の考察に入る前に、同句末の「含語」という語について確認しておきたい。「含語」については、先掲の『川口大系』頭注によると、板本では「合語」と作る本文異同が指摘されている。ただ、その「含語」について、『川口大系』では「語を含める」と訓読が示されているのみで、詳しい語釈はなされていない。先行の注釈書においても、先掲の解釈以上に触れられてはいなかった。

「含語」の辞書語釈を確認すると、『漢詞』『大漢』『学研漢和』『日国』には熟語として立項がなかった。また、道真詩以外の用例についても、今回『全唐詩』を含め一例も確認できず、平易な熟語ではなかったとも考えられる。道真詩における意味としては、『川口大系』で訓じられている様に、燕雀の鳴き声が「言葉を含んでいる」かの様な情景を詠んだものとして解する事もできそうであるが、現存の作品としては道真独自の熟語と言うことになる。

対して、異文の「合語」については、一例のみ『礼記』に用例を確認できた。辞書では以下の様に解釈されている。

〈「合語」辞書語釈〉

『漢詞』指合於君臣父子長幼之道的言辞。

『大漢』礼式の一つ。郷射・郷飲酒・大射・燕射の時に、先王の

法を言説し、義理を合会して告げること。

『学研漢和』（立項なし）

『日国』（立項なし）

これによると「合語」は儀礼に関する固有名詞であり、今回の道真詩がこの意味で「合語」を用いている可能性は低いかと考えられる。なお、「合語」になっている『菅家後集』伝本について本文を確認すると、以下の通り訓点が振られていた。

◎［国立公文書館　慶長本］

喃ニ〻嘖ニ々如二合ヒ一語ラフカ一

◎［貞享四年版本］

喃ニ〻嘖ニ〻如トシ二合ヒ一語スルカ一

※影印参照元は稿末の参考資料欄に掲載した。

［国立公文書館　慶長本］の訓の様に、「合ひ語らふ」という解釈であれば、燕雀が囀り合っている情景として、詩意にも合うと言えるだろうか。先掲の清藤氏の注釈では、この訓釈と同様に、「仲よく睦言をかわしている」との解釈を取られたものと考えられる。

以上、「含語」と「合語」について、用例を検索して校勘を試みたが、いずれも中国において確認できる実例の少ない熟語であり、どちらが妥当であるかの判断はつかなかった。本稿としては、この詩句は燕雀が経文を口ずさむ様な情景を描こうとしていることから、「意味のある言葉（経文）を鳴き声に含めている様だ」と言う意味として、「含語」の方が適しているのではないかと考えたい。

五―（二）、「喃喃」の中国用例

まず、「喃喃」の辞書語釈を確認してみる。

〈「喃喃」辞書語釈〉

『漢詞』象声詞。❶低語声。❷読書声。❸鳥啼声。

『大漢』㈠くどくどと語る。㈡読書の声。

『学研漢和』もたもたといつまでも続けてしゃべるさま。

『日国』〔名〕（形動タリ）（「喃」はしゃべる音、またはしゃべる意）しゃべり続けること。小声でいつまでもしゃべっているさまをいう。

※『漢詞』では、『大漢』が「㈠くどくどと語る」の項で引く『北史』の用例（後掲）について、「❶低語声」（「低語」は「ささやく」『大漢』）の項に引用している。

『大漢』『学研漢和』『日国』では「くどくどと語る」「しゃべり続ける」意味の用法が第一義にあり、鳥の鳴く声としての用法は『漢詞』のみに記述があった。ただ、『漢詞』においても「鳥の鳴き声」としての用法は第三義に列しており、主な用法としては位置づけら

れていないと見られる。次に「喃」の字音を確認する。

〈「喃」字音〉

『切韻』［Pelliot. 2011］　下平声咸韻・女咸切　語諵

『広韻』　下平声咸韻・女咸切　詁諵也

『学研漢和』（中古音）nʌm（ndʌm）

※『切韻』『広韻』は、いずれも「諵」（口偏ではなく言偏）字の記述を引用した。『広韻』の「喃」の項目には「上（引用者注・諵）同」と意注があり、「喃」と「諵」は通用字として認識されていたと考えられる。

『学研漢和』の音声記号に基づけば、「喃喃」は「ナムナム」に近い音となるであろうか。音そのものとしては鳥の鳴き声を模写したものとは思われず、元来はくどくどと語る意味のオノマトペであったとも考えられる。

次に中国における用例を見てみたい。まず『全唐詩』には、「喃喃」の用例は全十二例確認できた。以下、年代順に三例を挙げてみる。

○『全唐詩』巻二六五　顧況「李供奉弾箜篌歌」（部分）

大絃似秋雁　聯聯度隴関

小絃似春燕　**喃喃**向人語

この用例では、前の二句と対を成して用いられており、「秋雁」が「聯聯」と飛んでいく様と、「春燕」が「喃喃」と人に語り掛けるように鳴く様で、「大絃」と「小絃」の音色を対照的に表現していると考えられる。

○『白氏文集』巻一「燕詩示劉叟」（部分）［『新釈漢文大系　白氏文集一』］※訓読もこれによる

辛勤三十日　母瘦雛漸肥　　辛勤（しんきん）三十日、母痩せ　雛漸く肥ゆ。

喃喃教言語　一一刷毛衣　　喃喃として言語を教へ、一一　毛衣を刷（かいつくろ）ふ。

一旦羽翼成　引上庭樹枝　　一旦　羽翼成れば、引きゐて庭樹の枝に上らしむ。

こちらは燕の母鳥が雛に言葉を教える場面に「喃喃」が用いられている。次の句には「一一毛衣を刷ふ」ともあり、甲斐甲斐しく言葉を教えたり、世話を焼くと言った内容と思われる。注釈書の語釈で「喃喃」は「小声でぼそぼそつぶやくさま。母ツバメが子ツバメに鳴き声を教える様子を想像していう。」とされ、また通釈で「ピーピーと鳴き声を教わり」と訳されている。鳴き声を人の言葉の様に聞きなしている表現とも言えるだろうか。「小声でぼそぼそつぶやく」と言う解釈は、『日国』の語釈「小声でいつまでもしゃべっ

ているさま」に近くもある。ただ、小声と取る必要があるかは疑問であり、単に長々と囀り続けている様子ではないかとも考えられる。

○『全唐詩』巻八〇六　寒山「三百三首之十六」

（前略）

山果獼猴摘　池魚白鷺銜

仙書一両巻　樹下読**喃喃**

この詩では、「喃喃」が樹の下で書物を読む情景に用いられている。「仙書一両巻」の文章をブツブツと口に出しながら読んでいる様子であろうか。寒山にはもう一例「喃喃」の用例があり、そちらも書物を「読」む場面で用いられている。道真詩における「喃喃」も、「読経」のそばに寄ってきて「含語」するがごとく囀る燕の様子に用いられており、ブツブツと何かを「読」む情景として、この寒山詩の例と重なる部分がある。

以上三例の『全唐詩』所収の「喃喃」例を確認したが、いずれも何か言葉を語り掛けたり、ブツブツと喋る様子に用いられていると考えられた。一言二言短く発語すると言うよりは、ある程度長い、お喋りの様な声を表現していると考えられる。

詩以外の道真以前の中国用例としては、本稿の調査では次の『北史』の一例のみを確認できた。

○『北史』巻七十一　列伝第五十九　隋宗室諸王　房陵王勇（部分）［欽定四庫全書］

又云、諸王皆得奴、独不与我。乃向西北奮頭、**喃喃**細語。

この用例では波線部が台詞で、皆が「奴」を得ているのに自分だけ与えられていない、という文句を言っている場面と見られる。「細語」は「ささやく。こまやかに情を訴へ語る。」（『大漢』）事であり、「喃喃」は小声でブツブツと不平を漏らす情景であろうか。その点では、『漢詞』の❶「低語」（ささやく『大漢』）の解釈が近いかと思われる。

以上、唐以前の中国における「喃喃」の用例を確認してきたが、その用法について次の表二にまとめてみた。

表二　唐以前の中国における「喃喃」の意味用法

「喃喃」の意味用法		用例数	用例資料・作者名
鳥の鳴き声	燕	4	顧況、白居易、唐彦謙、光威裒、他
	鵲	1	杜牧
	鳳	1	施肩吾
	種不詳	2	孟郊、貫休
		(8)	
人の声	書物を読む声	2	寒山
	会話の声	2	可止、『北史』
	歌声	1	魚玄機
		(5)	
合計		13	『全唐詩』十二例、散文一例

まず、『全唐詩』に用例が見られるが、散文には例がそれほど残っていない語であると言える。意味としては、「鳥の鳴き声」としての用法が半数以上を占めている事が分かった。この「鳥の鳴き声」の用法は、辞書語釈では『漢詞』の第三義にあるのみであったが、今回確認できた用例を見る限り、唐以前においては主流の用法であった可能性もある。また、人の声としての用法では、本を読んだり、「低語」「細語」と表される様に、ブツブツと呪文のごとく、ある程度長さのある発語をする場面で用いられていることが分かった。

更に、表には示していないが、「喃喃」が「語」と共起して用いられている例が全十三例中の九例を占めた。道真詩においても「**喃**嘖嘖如含**語**」と「語」が共起しており、注目すべき特徴であると言える（注二）。「語」は、「かたる」の訓が示す通り、主に「談話；談論」（「語」の『漢詞』第一義）を意味し、ある程度の長さのある言葉・文章を話す情景を表すと言える。「喃喃」についても、人間のお喋りの様な、継続する鳥の鳴き声を表している事を、この「語」との共起の関係性が示していると考えられる。この点では、鳥の声に用いる用法も、人の声に用いる「喃喃」の意味用法と通じているとも言える。

道真詩における「喃喃」は、唐詩において一般的であった、鳥（特に燕）の鳴き声としての用法で用いられ、また「語」と共起する点も、中国例に沿った用法であると言える。

五―（三）、「嘖嘖」の中国用例

まず辞書語釈を確認する。

〈「嘖嘖」辞書語釈〉

『漢詞』❶象声詞。形容声音軽細。多指鳥虫鳴声。❷嘆詞。表示賛嘆、嘆息、驚異等。❸形容議論紛紛。

『大漢』㈠言葉のやかましいさま。言ひ争ふさま。㈡口々にやかましく噂をするさま。口々に称讃して措かぬさま。㈢鳥の鳴く声。

『学研漢和』しきりに舌打ちしてほめるさま。

『日国』〔名〕（形動タリ）口々に言いはやすさま。また、盛んにほめたてること。

「嘖嘖」についても「喃喃」と同じく、辞書語釈では「鳥の鳴き声」としての用法は主とされていない傾向が見られる。『大漢』では「言ひ争ふさま」が第一義とされており、『日国』には鳥の鳴き声としての用法の記載がない。『漢詞』にのみ「象声詞」として、「鳥虫鳴声」の用法が第一義に挙げられている。『大漢』『学研漢和』『日国』では、「言葉のやかましい」「口々に言いはやす」等、人間の発話に用いる表現としての語釈が主になっていると言える。「嘖」の字音については以下の通りであった。

〈「嘖」字音〉

『切韻』［Pelliot. 2011］入声麦韻・側革反　怒亦嘖

『広韻』入声陌韻・側伯切、入声麦韻・士革切　嘖嘖叫也、入声麦韻・側革切　大呼声

『学研漢和』（中古音）tsɛk

※『切韻』は「讀」（口偏ではなく言偏）字の記述を引用した。意注に「亦嘖」とあり、「讀」と「嘖」は通用されていたと考えられる。『広韻』における「讀」（入声麦韻・側革切）の意注にも、「同上（引用者注・嘖）」とあった。

『学研漢和』の音声記号に基づき、入声である点も考慮すれば、「嘖嘖」は「ツェッツェッ」と言う音に近いだろうか。舌打ちの様な、オノマトペ的な語であったと考えられる。

まずは中国における「嘖嘖」の用法を確認してみる。『全唐詩』には計十例が確認でき、内九例が鳥の鳴き声、一例が虫の音に対しての用例であった。以下、年代順に四例を挙げる。

○『全唐詩』巻一三六　儲光羲「野田黄雀行」

嘖嘖野田雀　不知軀体微
間穿深蒿裡　争食復争飛
（後略）

この詩は耕地で遊ぶ雀の様子を詠んだ、のどかな作品と考えられる。「不知軀体微」（体の小さいのを気にもせず・本稿執筆者試訳）飛び回る雀の様子が浮かんでくる。「嘖嘖」は首頭に置かれ、雀の鳴き声をぱっと想起させる効果を持っていると解せようか。

○『全唐詩』巻三九一　李賀「南山田中行」

秋野明　秋楓白
塘水漻漻虫**嘖嘖**
雲根苔蘚山上石
冷紅泣露嬌啼色
（後略）

こちらの李賀の例では、虫の鳴き声に「嘖嘖」が用いられている。季節は「秋」で、様々な虫の鳴き声が想像される。「漻漻」は「清澈貌」（『漢詞』）なので、「嘖嘖」も虫の清らかで風情ある鳴き声の形容として捉えられるだろうか。

○『白氏文集』巻六「観稼」（部分）［『新釈漢文大系　白氏文集二上』］※訓読もこれによる

累累繞場稼　累累たり場を繞る稼（か）
嘖嘖群飛雀　嘖嘖たり群飛の雀

年豊豈独人　年の豊かなるは豈に独り人のみならんや
禽鳥声亦楽　禽鳥　声亦た楽しむ

この白詩では「嘖嘖」の下に「群飛雀」とあって、複数羽の雀が鳴き合う様が明確に描かれている。注釈書では「ちいちいと鳴き騒ぐ雀」と訳されており、雀の鳴き声の擬音語として用いられていると言える。「禽鳥声亦楽」ともあり、人と共に豊年を喜ぶ雀の鳴き声と理解でき、「うるさい」と言った否定的な感情は無い様に思われる。

○『白氏文集』巻十「渓中早春」（部分）［『新釈漢文大系　白氏文集二下』］※訓読もこれによる

愛此天気暖　此の天気の暖かなるを愛し、
来払渓辺石　来りては渓辺の石を払ふ。
一坐欲忘帰　一たび坐すれば帰るを忘れんと欲し、
暮禽声**嘖嘖**　暮禽（ぼきん）声嘖嘖たり。
蓬蒿隔桑棗　蓬蒿（ほうかう）桑棗（さうさう）を隔て、
隠映煙火夕　隠映す　煙火の夕べ。

同じ白居易の「嘖嘖」例でも、こちらは「暮禽」の鳴き声として、雀の鳴き声とは明示されていない。注釈書では「日暮れの鳥たちのチチチと鳴く声」（通釈）、「鳥が軽やかに囀るさま」（語釈）と解されており、引用初句に「天気暖」ともある様に、のどかな早春の一幕の情景と考えられる。

『全唐詩』以外の道真以前の中国例としては、今回、以下の『爾雅』と『三国志』の二例のみを確認できた。後漢の蔡邕の「短人賦」の例も、「嘖嘖」の例として『大漢』に引用があったが、本文異同が確認できたため、本稿では取り上げなかった（注三）。

○『爾雅』釈鳥（部分）［四部叢刊初編］

春扈鳻鶞夏扈窃玄秋扈窃藍冬扈窃黄桑扈窃脂棘扈窃丹行扈喈喈宵扈**嘖嘖**

「扈」は「農桑侯鳥的通称」（『漢詞』、注四）とされており、農業・蚕業の作業時期を知らせる鳥と解釈できるだろうか。ここでは「宵扈**嘖嘖**」とあるので、特に宵に鳴く鳥の声を「嘖嘖」で表現していると考えられる。先に挙げた白居易「渓中早春」の例でも、「暮禽」の鳴き声として「嘖嘖」が用いられており、夕暮れの暗い時間帯に鳴く鳥の声として共通点があると言える。

○『三国志』魏志巻二十九管略伝（部分）［乾隆御覧四庫全書薈要］

※句読点は『漢籍電子文献資料庫』に拠る

父為利漕、利漕民郭恩兄弟三人、皆得躄疾、使輅筮其所由。輅曰「卦中有君本墓、墓中有女鬼、非君伯母、当叔母也。昔饑荒之世、

当有利其数升米者、排著井中、**嘖嘖**有声、推一大石、下破其頭、孤魂冤痛、自訴於天。」於是恩涕泣服罪。

この『三国志』の用例は『大漢』第一義「言葉のやかましいさま。言ひ争ふさま。」の用例として引かれており、人の声としての用例である。文脈から、井戸に落ちた叔母の、助けを求める様な声と解せるだろうか。井戸の中の薄暗闇という情景は、先掲の白居易「渓中早春」と『爾雅』の夕暮れにおける用例と共通していると言えるかも知れない。なお、人の声としての用法は、唐代以前では今回この『三国志』の一例のみしか確認できなかった。

以上、『全唐詩』と『爾雅』『三国志』における「嘖嘖」の用例を確認した。意味用法を以下表三にまとめてみた。

表三　唐以前の中国における「嘖嘖」の意味用法

「嘖嘖」の意味用法		用例数	用例資料・作者名
鳥の鳴き声	雀	5	李端、武元衡、韓愈、白居易、他
	鵲	1	李白、陳陶
	種不詳	4	『爾雅』、王勃、孟郊
		(10)	
虫の鳴き声（種不詳）		1	李賀
人の声		1	『三国志』
合計		12	『全唐詩』十例、散文二例

今回確認できた全十二例中、十例が鳥の鳴き声としての用法であり、唐詩を中心に「嘖嘖」は鳥の鳴き声が主な用法であったと考えられる。しかし、辞書語釈としては『大漢』『日国』では「言い争う」意味が第一義に置かれており、表三で示した意味用法の傾向とは異なっていると言える。『切韻』の「讀」の意注にも「怒」とあり、本来「嘖嘖」は人の言い争う意味が主であった可能性もあるが、少なくとも唐代の詩語としての「嘖嘖」は、『大漢』『日国』にある「やかましい」「言いはやす」といった意味よりも、『漢詞』第一義に「鳥虫鳴声」とあるような、鳥や虫の鳴き声を表す用法が中心であったと考えられる。

道真詩の例は、唐詩詩語としての用法に従って、雀の鳴き声として用いられている可能性が高いと考えられる。

五―（四）、『菅家後集』「喃喃嘖嘖」例

前節まで、「喃喃」と「嘖嘖」それぞれの中国用例を確認してきた。両語共に、『大漢』『学研漢和』『日国』の本邦の辞書語釈上は「くどくどと語る」（『大漢』喃喃）、「言ひ争ふ」（『大漢』嘖嘖）と言った、人の話し声を形容する用法が第一義に位置づけられていたが、本稿の小調査で、少なくとも唐詩詩語としては、いずれも親しみある「鳥の鳴く声」の擬音語として用いられる場合が多かった事が分かった。この点を踏まえると、『後集』における「喃喃嘖嘖」の用例も、『川口大系』や柳澤氏の取られる、人の発話を対象とする「くどくどと語る」「やかましく言い争う」意味の用法ではなく、燕雀の好ましく感じられる鳴き声の擬声語と取る方が自然ではない

かと考えられる。

また、唐詩の用例の中でも、特に白居易の用例として「喃喃」一例、「嘖嘖」四例が確認できた。「喃喃」も「嘖嘖」も、『全唐詩』中にそれぞれ十例ほどしか用例がなく、唐詩において多用されていたとは言い難い。「喃喃嘖嘖」が用いられた道真詩は、題にも「詠楽天北窓三友詩」とある様に、白詩を意識した作品であり、白居易の用いた「喃喃」と「嘖嘖」の影響がある可能性は高いと考えられる。ただし、詩題にある白楽天の「北窓三友詩」そのものには「喃喃」「嘖嘖」の二語は用いられていない。

なお、「喃喃嘖嘖」という畳語連続の表現は、今回の調査では中国・本邦共に『後集』以外の用例は確認できなかった。「喃喃嘖嘖」に限らず、「喃喃」「嘖嘖」がそれぞれ畳語連続を成す例としては、「喃喃」には無く、「嘖嘖」には以下の二例を確認できた。

○『全唐詩』巻三八　張籍「廃宅行」［畑村・橘・佐藤（二〇一二）］※訓読もこれに拠る

胡馬崩騰満阡陌　胡馬崩騰して　阡陌に満ち
都人避乱唯空宅　都人　乱を避けて　唯だ空宅のみ
宅辺青桑垂宛宛　宅辺の青桑　垂るること宛宛たり
野蚕食葉還成繭　野蚕　葉を食らい　還た繭を成す
黄雀啣草入燕窠　黄雀　草を啣んで　燕窠に入り
嘖嘖啾啾白日晩　嘖嘖啾啾として　白日晩る

去時禾黍埋地中　去る時　禾黍　地中に埋め
饑兵掘土翻重重　饑兵土を掘りて翻すこと重重たり
（後略）

○『全唐詩』巻四八五　鮑溶「巣烏行」

（前略）
黄雀亦引数青雀　雀飛未遠烏驚落
既分青雀噉爾雛　爾雛雖長心何如
将飛不飛猶未忍　古瑟写哀哀不尽
殺生養生復養生　鳴鳴**嘖嘖**何時平

二例共「嘖嘖」は雀の鳴き声として用いられていると考えられ、また『後集』の例と同じ七言詩の用例である。一例目の張籍の例では「啾啾」と連接して「黄雀」の鳴き声として用いられている。「白日晩る」ともあるので、際限なく鳴き続ける様子を表すために畳語を重ねて用いたと考えられようか。二例目の鮑溶の例では「鳴鳴」と連接しているが、この「鳴鳴」については、辞書語釈では『漢詞』「❶歌詠声；吟詠声。❷象声詞。多形容低沉的声響。」、『大漢』「うたを歌ふ声」とあり、特に鳥の鳴き声としての用法は記述がなかった。ただ、『全唐詩』に「鳴鳴啄人鴉」（曹鄴「築城」）と、烏の鳴き声としての用法も見られ、この鮑溶の詩にも引用部二句目に「烏」が登場することから、「鳴鳴」は烏の鳴き声であると見る

こともできる。そう捉えれば、「嗚嗚嘖嘖」は、道真詩の「喃喃嘖嘖」に非常に近い、鳥二種の鳴き声を表す畳語を並べた表現であると言える。ちなみに、作者の鮑溶は『和漢朗詠集』にも一首作品が採られている中唐期の詩人である。

「喃喃嘖嘖」そのものの用例は中国例としては確認できなかったが、これらの畳語連続例が見られることから、当時の中国における詩の語法としても異質ではなかったと考えられる。

五―（五）、燕雀の鳴き声に関する諺

道真詩の「喃喃嘖嘖」について、燕雀の鳴き声を表した擬音語、としての解釈を提示したが、この燕と雀の鳴き声に関わる諺から、道真詩の表現の持つ意味について考察してみたい。

今回の「喃喃嘖嘖」の用いられた道真詩の情景――読経をしている傍に燕雀が寄ってきて、経を囀るかのように鳴いている――というのは、本邦の諺「勧学院の雀は蒙求を囀る」に類似した場面であると言える。太田（一九七一）によると、この「勧学院」の諺は平安末期成立の『宝物集』に初出例が見られるとされるが、同様の諺として「文屋ほとりの雀は秋収冬蔵と鳴く」（「秋収冬蔵」は『千字文』中の一節であり、その語句を唱える事が含意されている）と言うのが、既に平安中期の『宇津保物語』に断片的ながら見られる事が指摘されている。平安前期の道真の「喃喃嘖嘖如含語」と言う表現も、こうした雀が語句を囀っている様だ、と言う諺の発想に連なっている可能性があるのではないだろうか。そう捉えると、やはり「喃喃嘖嘖」には「うるさい」「やかましい」と言った耳障りな意味合いはなく、燕雀の、人間の語句を喋っている様な馴染み深い鳴き声として解釈すべきかと思われる。燕雀については、古くから諺に現れる様な、身近な小鳥として親しまれていた感覚もあった可能性も考えられる。

また、燕雀の組み合わせは、中国の諺「燕雀安知鴻鵠之志哉（燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや）」（『史記』陳渉世家）に代表されるように、小鳥、延いては「比喩品質卑劣的人」（『漢詞』「燕雀」第二義）を表す定型のものでもある。それを、直接「燕雀」と表さずに、それぞれの鳴き声の擬音語の組み合わせで婉曲的に表現したのは、道真の独創性であるとも言える。

六、道真詩の「嗷嗷」「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」解釈まとめ
―及び今後の課題

以上の「嗷嗷」「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」についての調査結果をまとめると、次の表四の様になる。

表四　『菅家文草』『菅家後集』における「嗷嗷」「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」

語と用例の所在	『川口大系』解釈	『大漢和辞典』語釈	『漢語大詞典』語釈	本稿の道真詩上の解釈
嗷嗷 『菅家文草』（二三二六）	衆口の罵り叫ぶ声のさま	㊀かまびすしく呼ぶ声。㊂衆人の罵りそしる声	❶哀鳴声；哀号声。❷形容衆声喧雑。	民衆の不満の声
咬咬 『菅家文草』（四五七）	鳥の囀る声	鳥の鳴く声	鳥鳴声	鳥の鳴く声
喃喃 『菅原後集』（四七七）	くどくどと語るさま。より多く燕の声にいう	㊀くどくどと語る	❶低語声。❸鳥啼声。	燕の鳴き声
嘖嘖 『菅家後集』（四七七）	やかましく言い争うさま。より多く雀の声にいう	㊀言葉のやかましいさま。㊂鳥の鳴く声。	❶象声詞。形容声音軽細。多指鳥虫鳴声。	雀の鳴き声

○『大漢和辞典』『漢語大詞典』語釈には、第一義と、『菅家文草』『菅家後集』の用法に当たる語釈を抜粋引用した。

表四を見ると、「嗷嗷」と「咬咬」については、それぞれの解釈に大きな乖離はないと考えられる。「咬咬」の解釈については、『川口大系』では「鳴く」ではなく「囀る」と表現しているが、「鳴く」との相違は特に無いであろうと本稿では考える。一方、「喃喃」と「嘖嘖」については、『川口大系』と『大漢』の取る意味と、中国の辞典である『漢詞』の取る意味に若干の差異がある様である。『川口大系』『大漢』では「くどくどと語る」「やかましく言い争う」と言った、騒がしい意味を主にしているのに対し、『漢詞』ではそうした意味を主には取り上げていない。どちらが道真詩の内容に適した解釈であるかだが、今回の『全唐詩』を中心とした用例調査からは、『漢詞』の語釈の方が的確であると考えられた。道真が中国唐代の言葉の用法に、深く通じていた事を示す一例と言えるだろうか。

更に「嘖嘖」に関して言えば、中国の『漢詞』における「多指鳥虫鳴声」との語釈は、前章における中国用例の小調査から分かった語彙使用の実態を、極めて的確に投影したものである事が理解できた。それに対して本邦編纂の三辞書は、「人」か「鳥」、乃至「人」のみでの用法にしか触れられておらず、本稿で確認できた実際の用法とはやや乖離があるとも言える。また、意味の掲載順についても、日中での優先順位に差が認められた。その中で、中国の辞書の意味の優先順位は、より中国の実際の用例に沿ったものである可能性が考えられた。「喃喃」「嘖嘖」の二語の事象ではあるが、特にオノマトペ的語彙や詩語の解釈においては、実際の用例を吟味し、また日中の辞書の語釈の差違にも注意をしていく必要がある事が確認できた。

今後の課題としては、今回、「喃喃」「嘖嘖」の二語について、辞書間の取る語義解釈の差異が確認できたが、こうした例が他にも存在するか、更なる調査が必要であると言える。『菅家文草』『菅家後集』中には動物の鳴き声を表す畳語は今回の四語のみであったが、本邦平安期までの他の漢詩漢文作品にこうした鳴き声を表した漢語

の例がないか、それらが中国の用法に沿っているか、調査を広げてみたい。中国のオノマトペ的な語彙を、本邦の平安期までの文人らがどこまで正確に理解していたのか、今回道真の理解の正確さは確認できたが、他の文人の例についても検証してみたい。

〈注記〉

一、『詩経』中のもう一例の「嗷嗷」例は以下の一例。

○『詩経』小雅　節南山之什「十月之交」（部分）［『新釈漢文大系　詩経中』］※訓読もこれによる

黽勉従事　不敢告労　　黽勉（つと）めて事に従ひ　敢へて労を告げず
無罪無辜　讒口囂囂　　罪無く辜（つみ）無くして　讒口囂囂（がうがう）たり
下民之孽　匪降自天　　下民の孽（わざわひ）は　天より降るに匪（あら）ず

右の「囂囂」となっている箇所が、『漢書』巻三十六「楚元王伝第六劉向」［欽定四庫全書本、王先謙漢書補注本］において「謷謷」となって引かれており、古くは「謷謷」であった可能性がある。意味としては「かまびすしくそしることが多いさま」（注釈書語釈）であり、「謷謷」辞書語釈の「衆人が罵りそしる声」（『大漢』㈢）でも通じると言える。

二、「喃喃」と「語」の密接な関係から、「喃語」と言う熟語が想起されるが、「喃語」は唐以前の中国では殆ど用いられていなかった語であったことが確認できた。「喃語」の辞書語釈は以下の通り。

〈「喃語」辞書語釈〉

『漢詞』（立項なし）

『大漢』くどくどと語る。

『学研漢和』①くどくどと話す。②男女が仲よく話し続ける。

『日国』①くどくどと話すこと。また、ぺちゃくちゃとしゃべること。②男女がむつまじくかたりあうこと。③乳児の、いまだことばにならない段階の発声。

この様に、本邦では「男女が話し続ける」「乳児の発声」と言った意味にも用いられる、ある程度用例の見える語と考えられるが、本稿の調査では中国における唐以前の「喃語」の用例は確認できなかった。「喃語」の持つ「男女が話し続ける」「乳児の発声」と言った意味は、中国唐代、また道真の時代の本邦には無かった可能性が高く、道真詩の「喃喃」の解釈について、男女の睦まじい話し声や、乳児語の様な舌足らずな声を当てはめる事はできないと考えたい。

三、蔡邕の作品集『蔡中郎集』にて「短人賦」を確認すると、［欽定四庫全書］では「嘖嘖怒語」とある箇所が、［四部叢刊初編］では「嘘嘖怒語」となっていた。どちらが優れた文であるか確実には決め難いが、「怒語」に係る語としては「嘘嘖」（「さけぶ」意『大漢』）の方がより適しているとも考えられる。よって蔡邕「短人賦」の例については、ここでは「嘖嘖」の用法の検証に用いることは避けた。

四、「鳶」について、『大漢』では「ふなしうずら」（鳥の種名）の意味しか記載がなかったが、『爾雅』の用例には合わない解釈と思われる。

〈参考文献〉

清藤鶴美（一九四三）『菅家後草謹解』太宰府天満宮飛梅講社本部
清藤鶴美（一九五三）『菅家後草』太宰府天満宮学業講社
太田晶一郎（一九七一）「勧学院の雀はなぜ蒙求を囀ったか」『東京大学史料編纂所報』六
清藤鶴美（一九七一）『菅家の文華』太宰府天満宮文化研究所
柳澤良一（二〇〇二）「『菅家後集』注解稿（三）」『北陸古典研究』一七
谷口孝介（二〇〇六）『菅原道真の詩と学問』塙書房

畑村学・橘英範・佐藤大志（二〇一二）「張籍詩訳注（二〇）―「隴頭行」「廃宅行」「秋夜長」―」『宇部工業高等専門学校研究報告』五八
安部清哉・中山大輔（二〇一二）「唐詩詩語「欹枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）」『学習院大学文学部研究年報』五九
中山大輔（二〇二二甲）「『菅家文草』『菅家後集』を中心に見た上代・中古前期の漢語畳語の受容―併せて川口久雄氏校注旧大系本の「適〻遇」を「適遇」に訂す」『人文』二〇
中山大輔（二〇二二乙）「『菅家文草』『菅家後集』から見た仏教語・唐代口語の受容―畳語を例として―」『東洋文化研究』二四
中山大輔（二〇二三）「道真『菅家文草』『菅家後集』の漢語研究（其三・『全唐詩』に稀な畳語篇）「煢煢」「芬芬」「懍懍」「脛脛」―併せて川口久雄氏校注旧大系本の字体「煢」を検証する―」『学習院大学国語国文学会誌』六六
中山大輔（予定稿）「道真『菅家文草』『菅家後集』の漢語研究（其五・「叱叱忿忿」）」（口頭発表予定）

〈参考資料〉

川口久雄『日本古典文学大系七二　菅家文草　菅家後集』岩波書店、一九六六年
『菅家文草』［国立公文書館　慶長本］国立公文書館デジタルアーカイブ　請求番号　特一二一―〇〇〇六　※内、巻十三の部分が『菅家後集』に当たる。
『菅家後草』［貞享四年版本］早稲田大学図書館　請求記号　へ一六　〇〇五〇六
諸橋轍次『大漢和辞典』修訂第二版、大修館書店、一九八九年
藤堂明保『学研漢和大字典』学習研究社、一九七八年
『漢語大詞典』上海辞書出版社、一九八六年
『佩文韻府』索引本、台湾商務印書館、一九六六年
『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇〇年
フランス国立図書館蔵『刊謬補闕切韻』Pelliot. 2011 https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8300232g
大英図書館蔵『切韻』Stein. 2071 http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=2461910755;recnum=2070
『大宋重修広韻』国立国会図書館デジタルコレクション、請求記号ＷＡ三五―三
『全唐詩検索系統』http://cls.lib.ntu.edu.tw/tang/Database/index.html
『唐宋詞全文資料庫』http://cls.lib.ntu.edu.tw/CSP/W_DB/index.htm
『宋詩』元智大学 http://cls.lib.ntu.edu.tw/QSS/home.htm
『漢籍電子文献資料庫』http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm
『中国哲学書電子化計画』https://ctext.org/zh
内田泉之助・網祐次『新釈漢文大系一四　文選（詩篇）上』明治書院、一九六三年
吉田賢杭『新釈漢文大系三八　史記一』明治書院、一九七三年
高橋忠彦『新釈漢文大系八一　文選（賦篇）下』明治書院、二〇〇一年
岡村繁『新釈漢文大系九七　白氏文集一』明治書院、二〇一七年
岡村繁『新釈漢文大系九八　白氏文集二上』明治書院、二〇〇七年
岡村繁『新釈漢文大系一一七　白氏文集二下』明治書院、二〇〇七年
石川忠久『新釈漢文大系一一一　詩経中』明治書院、一九九八年
川口久雄・若林力『菅家文草菅家後集詩句總索引』明治書院、一九七八年

【付記】本稿の論述については、安部清哉氏（学習院大学教授）にご指導を頂きました。特に「勧学院の雀は蒙求を囀る」の諺との関わりは、先生のご示唆を基に本稿執筆者が考察を試みたものです。なお、初校時

『全唐詩』巻二八「廃居行」に関してのご教授と、その注釈論文の畑村・橋・佐藤（二〇一二）も併せてお示し頂き、加筆・修正を行いました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ENGLISH SUMMARY

The study of Chinese words in Michizane's "Kanke Bunso", "Kanke Koushu"（the fourth volume: the reduplications which express the crying sounds '嗷嗷', '咬咬', '喃喃', '嘖嘖'.

NAKAYAMA Daisuke

This article deals with the four words of '嗷嗷,' '咬咬,' '喃喃,' '嘖嘖,' which are Chinese words found in "Kanke Bunso" and "Kanke Koushu". The purpose of this book is to examine the interpretation of Michizane's works in light of the usage in China, including whether there is a Japanese-style aspect unique to Japan. As a result of the investigation, it was confirmed that these four words were used with correct meanings in accordance with the usage in China.

As for '喃喃,' '嘖嘖,' in the poem in "Kanke Koushu", Hisao Kawaguchi's annotations on the Taikei（old edition）, etc, state that 'noisy,' and the interpretation of "Daikanwa Jiten"（second edition）has the same meaning. However, when we checked the examples of poems in the Tang Dynasty in China, we found that some poems were simply used as birdsong without the meaning of 'noisy,' and it is highly possible that the use of "Kanke Koushu" was used in a sense close to this Chinese example. It can be said that it is necessary to be careful in interpreting the words in a poem, and it is an example that shows the richness of Michizane's usage of vocabulary.

Key Words: Sugawara no Michizane, Kanke bunsou, Kanke koushu, reduplication, onomatopoeia